

鈍・根・録

宮本百合子

青空文庫

六月十三日に、ぬがされていた足袋をはき、それから帯をしめ、風呂敷の包みを下げて舗道へ出たら、駒下駄の二つの齒がアスファルトにあたる感じが、一足一足と、異様にはつきり氷ひょうのう囊の下ひょうのうの心臓にこたえた。その時着ていた着物とは全くかわりなく、すっかり夏になりきっている往来のカンカンした日光の強さと、足の裏から体に伝わったその下駄の齒の感覚を、僅かに七八歩あるいただけだがわたしは恐らく一生忘れ得ないであろう。

ペンがこうして原稿紙に当たってゆく抵抗の感じに、すっかりそのままというのではないが、やっぱりその下駄の齒から心臓に伝って来た感覚に似たものがある。書くという動作を意識せずには、

書けない。今自分が生活の中から感じていることは、多様で、刻み目も深い。だが、そのどれをも同じほどとことんまで書くことが、可能であるとは云えないのである。

がらくたが永年つくねてある場所から、わたしは籐でこしらえた妙な坐椅子のようなものを見つけたして来た。

寢床の上へその坐椅子を置き、しびれて曲りにくい脚をなげ出し、わたしは何通もの手紙を書いた。

二十になる妹がそのわきに長くころがって手紙を書いているわたしの様子を眺め、

「お姉さま、よくそうやってかけるわね」

と云った。わたしは昔のひとがやるように巻紙を片手にもち、筆のさきをもつて手紙を書いているのであった。書きながら上の空でわたしは、

「うむ」

と云い、やや暫く間をおいて、

「おかあさまにおそわったんだよ」

と、筆に墨をふくませつつ妹の顔は見ず云った。

「ふーん」

顎を振るようにしておかつぱの髪をパラリとさばき、黙っていたが、やがてころりと仰向きになって、

「——何だか気ぬけがしちゃった」

と、弱々しい、しなやかな余韻のある声で云った。

わたしは黙っている。自分はどの手紙にも、母が今生涯を終わったことは、母にとって最もよい終焉であつたと書き、その手紙にもそのことを大きい疑いをもたぬ字でかいているのであつた。

母が父の存命中、生涯を終つたことは、母にとって、一家にとつて、一つの幸福であると云う考えは、明瞭につよくわたしの心を貫いて存在している。

葬式の前、一寸人が絶えた時、袴のひだをキチンと立てて坐っていた父が、そこに一人だけ離れて坐っていた自分に向つて、「もうすこし生かしておいてやりたかったが、結局今死んで、おかさんは却つて満足出来ただろう」

と云った。父と、蠟燭の光が花と花との間に瞬いている祭壇の方を見やりながらわたしは、娘というより寧ろ総領息子のような風で、

「おかあさまがあとにおのこりになったら、万事に不満ばかりで、われわれも困ったし、自分もきつと不仕合わせに思いつたでしょうから、よかった」

そう答え、暫くして笑いながら、

「お父様、私が十一ぐらいのとき、団子坂の方へ散歩につれて行って下さったとき、道を歩きながら、お前のおつかさんにも困ったものだ。今更離縁すると云つてもお前たちがいるし、とおつしやられて、ひどく困った気持になったことがあるんだけど、覚え

ていらしつて？」

ときいた。

「へえ、そんなことがあつたかね」

父も笑い出し、若やいだユーモラスな目つきで、

「ちつとも覚えていない」

と云つた。そして、二言三言つづけて、妻としては全く世間ばなれのした妻であつた母を軽く擲^や揄^ゆするようなことを云つたが、不図、自分が思わず耳にとめた咳^{よしえ}ばらいをして、

「ああ、神官さんに葭江の略伝のようなものをやらなければならんが、お前一寸書いてやってくれないか。その中へこれまで何回も重病をわずらつたが奇蹟的に生きたことを入れた方がいいと思

うが——」

と云った。

母は多病であつたばかりでなく、娘であるわたしが屢々、世間のあたり前の女親が娘に対して示す具体的な情愛について自分の経験とは対蹠的なものとして考えたことがあるような独特な性格をもつて、一家の真中に構え、生活していた。

夫婦なかのよい義妹が何かの話のとき、

「ゆうべ、また例のようだね。お父様が、お母様に、お前なぜ一昨年病氣したときに死んでしまわなかつたのだと云つて、涙をおこぼしになつたのよ」

とおだやかな口調で云い、云い終るときつと唇を締め、身じろぎ

をせず私の顔を見つめたことがあった。出かける前か何かで立つたままきいていたわたしは、そのとき、

「ふーむ」

とより答えようがなかった。母が子等とだけ老後を送らなければならなくなったら、それは皆の不幸であろうとわたしが日頃思っていた根柢には、経済的に母が貧乏になることのほか、母自身の特色ある性格が大きい原因となっていたのであった。

母とわたしは、女対女の関係で暮して来、生活態度の上でどちらも徹底した譲歩というものはしなかった。

一九二八年八月自分がレーニングラードにいた時、二十一歳であつた次弟が自殺をしてから、母は、その弟の短い生涯と死に対

して自分などから見ると殆ど恐るべき影響を与えた非現実的な熱情の中へ、一層傍目もふらずおちこんでしまった。そういうファントスティックな力で、好んで人間の高く勁く燃ゆる精神の活動について話すのであったが、問題が実際に起ると、その同じ母が信じられぬほどの理由ない卑屈さや小さい打算や卑俗さによつて頸根っこをつかまれたように言動し、而もそれに賛成しない良人や子等に対して我執をはりとおすのであった。

母に現れるこの矛盾の瞬間は悲惨であると同時に、屡々娘である自分の胸に鋭い憎悪の火を点じた。昨年十二月末、宮本がとらわれ、一月十七日に「犯罪公論」的に扮飾された記事が出た次の晩であつたか、言葉にすればほんの十語に満たぬ応待であつたが、

その間にわたしは母の娘としてこの世に生きる心のきずなが、余りすつぱりと切り離されていることを知って、いか忿りも湧き立たぬほど索漠とした気持を経験した。

その気持のまま、私の日常生活には変動が生じた。荒川放水路のそばの、煤煙がふきこむ檻の内で自分は、母からの達筆な手紙を読まされた。文学的な大きい身ぶりで母が娘を思うことが説明されて終りに和歌の書添えてある手紙であつたが、手紙に添えた唯一足の足袋は、コハゼがぶらぶらになったのを袋に入れて洗濯屋がかえしてよこした、それなりを袋の中もあらためぬまま持たしてくれたものであつた。

わたしは片手に、徒に真白なばかりで、穿けぬ足袋をもち、片

手に手紙をもち、思わずも無言のまま佇んだが、その時憤りは感ぜず、静かに、だがつよく、母がもしこのような文学的教養めいたものをまるで持たない女であつたら、そしてたとえば自分によつて食つてゆく立場にあるとしたらどうであつたらうかと思つた。もう二度と物を云うことのない息子の顔を^{ひし}と胸元へ抱きよせながら、

「おおここがえらかつたか、おうおう」

と泣いてコメカミを撫でてやっていた小林の母の小さい濡れた顔が^{ほうふつ}髣髴と目に迫つた。

寒気の中で、ふところををし、出来るだけ少く身動きをするように正坐し、その日は久しい間文学的才能とか、文学的教養とか

いうものとそのひとの社会生活における、実践との間にある活々した関係について考えた。丁度そのことのあつた前に、チラリと新聞で「ナツプ」解散の報道を瞥^{べっけん}見したばかりの時であつたし、誰かからもつとはつきり状況についての説明を聞くということも不可能な環境であつたから、実際の生活からとびこんだ小さい例証も、関心の中心に在る問題とむすびつくのであつた。

チェホフ全集の広告、ジイド全集発刊の広告。それらも、やはりこの前後に、手にとることは出来ない新聞の上で見た。チェホフ全集が出ると知った時、自分はチェホフがその手紙の中で、小商人の倅として育った自分はいくじなく頭を下げる癖を克服するだけにでもどれほど闘ったか知れぬと云う意味のことを書いてい

たのを計らず思い出した。また、帝政時代のロシア・アカデミーがゴーリキイを一度は会員として決定しておきながら、ゴーリキイが政治的注意人物で、室内監禁をうけたりしたことがわかったら、あわてふためいて決定をとり消したことがあった。その時、そのようなアカデミーであるならば自身が会員であることを寧ろ屈辱とすると云ってアカデミーをゴーリキイとともに去ったチエホフ。そういうアントン・パヴロウィツチ・チエホフの面を、こんどチエホフ全集発行の任にあたるひとは、現代の状況にあつて、どのように評価しているであろうかとも考えた。日本にも文芸院とかいうものが警保局長の手でこしらえられるというより合いの時の写真を見て、わたしはこのチエホフとアカデミーとの歴

史的關係をまざまざと思い起したのであった。

その實際を知ればしるほど非人間的な条件の深刻さがわかるような生活の連鎖の中で、母に対する自分の心持が変化をうけるようなことが起った。三月になつてからであつたか、或る日、風のとよりに宮本がひどく病氣であるという噂のあること、だが何処に置かれているのかさがしても所在不明であるということが、わたしの耳にはいった。

わたしは、そのことを知らなかつた前と全く同じように、次の日も朝は僅々二尺四方ばかりの冬の日向に立つて五分間体操をやつた。乾いた手拭で裸の胸をこすつた。弁当をもくつた。一人の牛盗人に向つて帳面をひかえた警官が、どうだ、お前金齒がある

か？　口をあいて見ろと云い、ふむ、したないのか？　と訊いたら、牛盗人は一寸躊躇する風であつたが、徐ろにもう一遍口をあけ、ゆっくり舌を出して見せた、その様子を格子の間から見ていたわたしは声をあげて大笑いをした。

ふだんどおり笑っている。食べている。しかも、ふっと我にかえつて見ると、いつしかわたしは体じゆうに力をこめ、一心不乱に凄じく何ごとかを思い凝している。苦しいその数日の間に、謂わばわたしは、私等の結婚生活を再びその隅々まで生き直したようなものなのであつた。良人と妻との間にだけ経験された様々の歡び、美しき瞬間、愚かな瞬間、それらについて、その良人を失つた妻、または妻を失つた良人は、互の生活にだけあるその豊富

な生きた内容を誰にそっくりそのまま伝えることが出来よう。

わたしは愕然として、三十余年間ともに起きふしして来た男女として、父母の姿を新しく発見したのであった。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第四卷」新日本出版社

1979（昭和54）年9月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第四卷」河出書房

1951（昭和26）年12月発行

初出：「改造」改造社

1934（昭和9）年8月号

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2002年4月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鈍・根・録

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>